武蔵野日曜聖書講筵　降誕節祈祷会
受膏者キリスト
――詩篇第２篇――

１９９３年12月19日
小池辰雄

キリストの預言　義と愛　子にくちつけせよ

【詩篇２】

1 何(いか)なればもろもろの国人(くにびと)はさわぎたち
諸民(たみら)はむなしきことを謀(はか)るや。
2 地のもろもろの王はたちかまえ、
群伯(おさたち)はともに議(はか)り
エホバとその受膏者(じゅこうしゃ)とにさからいていう。
3 われらその械(かせ)をこぼちその縄をすてんと。
4 天に坐するもの笑いたまわん、
主かれらを嘲(あざけ)りたもうべし。
5 かくて主は忿恚(いきどおり)をもてものいい、
大いなる怒りをもてかれらを怖(おじ)まどわしめて宣給(のたも)う。
6 しかれども我わが王をわがきよきシオンの山にたてたりと。
7 われ詔命(みことのり)をのべん、
エホバわれに宣(のた)まえり、
なんじはわが子なり今日われなんじを生めり。
8 われに求めよ、
さらば汝にもろもろの国を嗣業(ゆずり)としてあたえ、
地の極(はて)をなんじの有(もの)としてあたえん。
9 汝くろがねの杖をもて彼等をうちやぶり、
陶工(すえつくり)のうつわもののごとくに打砕かんと。
10 されば汝等もろもろの王よ、
さとかれ地の審士輩(さばきびとら)おしえをうけよ。
11 畏(おそれ)をもてエホバにつかえ戦慄(おののき)をもてよろこべ。
12 子にくちつけせよ、おそらくはかれ怒りをはなち、
なんじら途(みち)にほろびん。

その忿恚はすみやかに燃ゆべければなり。
すべてかれに依頼むものは福いなり。

●キリストの預言

不思議な詩篇です。やはりキリストの預言に関わっている。

1 **何なればもろもろの国人はさわぎたち**
諸民はむなしきことを謀るや。

いつの世もこのようなわけです。論争だの争いだの戦争だのが繰り返されているわけです。結局、自己中心で、善隣友好関係というのをやらない。お隣の国と、何主義であろうと何民族であろうとみんな人間ですから、人であることは共通なんだ。ところが、人であることを忘れている。

「ひと」（人）は霊止、霊が止まると書く。神の霊がとどまっているのを霊止という。我々は霊止であるわけです。キリストの霊が止まっている。キリストの霊を宿している者を本当の霊止という。キリストを受肉しているわけです。

神・キリストを抜きにして――仏教ならお釈迦さんでもいいですが――互いに王も郡伯も議りごとをして、

2 **地のもろもろの王はたちかまえ、**
群伯はともに議り
エホバとその受膏者とにさからいていう。

「受膏者」というのは正に「クリストス」「膏注がれたる者」、神霊を注がれたる者です。「マーシァッハ」（メシヤ）です。

3 **われらその械をこぼちその縄をすてんと。**

ところが、そういうことをやっても、

4 **天に坐するもの笑いたまわん、**
主かれらを嘲りたもうべし。

という。これは非常に不思議な言葉です。

「天に坐するもの笑いたまわん」

という言葉は他にはちょっと出てこない。「笑う」「嘲る」は同じ内容のことを別な言葉で言っている。「笑止の沙汰だ」というわけだ。

5 **かくて主は忿恚をもてものいい、**
大いなる怒りをもてかれらを怖まどわしめて宣給う。

「羔羊の怒り」というのはこわい。獅子よりも恐い。これは黙示録に出ている。

「山と巌とに対いて言う『請う我らの上に堕ちて、御座に坐したもう者の御顔
より、羔羊の怒りより、我らを隠せ。そは御怒りの大いなる日既に来ればなり。

誰か立つことを得ん』（**黙示録６・16～17**）

恐いから逃げ隠れようと思っている。「羔羊の怒り」というのはキリストの怒りです。聖徒たちが

「いつまで復讐しないのですか」

と、10節に書いてある。

「彼ら大声に呼ばわりて言う『聖にして真（まこと）なる主よ、何時（いつ）まで審かずして地に住む者に我らの血の復讐をなし給わぬか』」（**黙示録６・10**）

「我々はみな殉道者である。道に殉じた者の復讐をなぜなさらないか。聖なる復讐をしてください」

というわけです。善きことに対して報いという言葉があります。

「汝らの報いは大いなるべし」

と。悪いことをすると、この復讐が恐い。この受膏者・キリストに逆らったら、これは勝てない。

「いくら悪口を言っても構わないが、聖霊をないがしろにしたらダメだぞ」

ということが別なところに書いてある。そういう意味で、聖霊は非常に大事なわけです。キリストの降誕ということは正に、審判（さばき）と恩恵（めぐみ）の基いであるところのキリストが現れたということ。

「この乳呑み子は大変なひとなんだ」

というわけです。

●義と愛

仏教の世界は、何でも赦してしまって、大慈大悲なんていうけれども、福音の世界は――預言者からずっとそうですけれども――「義と愛」が対立している。この義と愛は対立しているけれども、単なる対立ではない。

「福音の中に神の義が現れた」

とロマ書８章に書いてある。その神の義、福音の義というのは――神の御意を百％に行じている人が義人なんです――この義人はキリストの他にいない。

「義人なし、一人だになし」

とパウロが言っているのはそのこと。御意を行う人が義人なんです。この「義」という字は、道徳的に正しいとか正しくないとかいうことではない。キリストはそういう、御意を行ずるところの、体現しているところの義人である。その義を今度は、神の御意を体現した義人のその義を与える。これが愛なんです。だから、義と愛とは一つです。この義は、キリストが与えることにおいて、それが愛ということです。我々にはキリストの義が与えられる。そのことはイザヤ書に既に預言がある。

「5**わが義はちかづきわが救いはすでに出(いで)たり。わが腕(かいな)はもろもろの民をさばかん。もろもろの島はわれを俟望(まちのぞ)み、わがかいなに依頼(よりたのま)ん。**6**なんじら目をあげて天を観(み)また下なる地をみよ、天は烟(けむり)のごとくきえ地は衣のごとくふるび、その中にすむ者これとひとしく死なん。されどわが救いはとこしえにながらえ、わが義はくだくることなし。」（イザヤ51・5～6）**

「わが義はちかづきわが救いはすでに出たり」

という言葉です。義と救いが同義語につかってある。この義を与えるから、それが救になる。

「されどわが救いはとこしえにながらえ、わが義はくだくることなし」

と書いてある。８節にも、

「8**そはかれら衣のごとく蠹(しみ)にはまれ、羊の毛のごとく蟲(むし)にはまれん。されどわが義はとこしえに存(なが)らえ、わがすくい万代(よろずよ)におよぶべし」（イザヤ51・8）**

とある。義と救いが同義語に書いてある。義がなぜ救いかというと、義を与えるから救になる。この義は審くのではない。聖書の言葉というのは非常に深い連関を持っている。単なる概念的な相対的な区別ではない。

「神の義が福音のうちに現れた」

とパウロが言ったのはそのことなんです。ルターは

「どういうことだろうか？」

と、初めこの言葉に躓いた。ロマ書１章に、

「16**我は福音を恥とせず、この福音はユダヤ人を始めギリシヤ人にも、凡て信ずる者に救いを得さする神の力たればなり。**17**神の義はその福音のうちに顕(あらわ)れ、信仰より出でて信仰に進ましむ。録(しる)して『義人は信仰によりて生くべし』とある如し」（ロマ１・16～17）**

とある。

「義人は信仰によりて生くる」

ということは、

「信仰で生きている者は義人である」

ということです。

「神の義はその福音のうちに顕れ」

と、ここは一番はっきりしている。義が福音のうちにあらわれている。福音は恵みだから、義が恵みなんだ。キリストの義がそのまま無条件に与えられる。

「十字架・復活・聖霊」

のこの三つの切ることのできない事態が義であり、愛であり、福音であるわけです。みな同じことなんです。この義というのを旧約の審判の義とばかり考えてはダメです。旧約でもイザヤ書になるとそうではない。恵みになってしまう。

●子にくちつけせよ

詩篇第2篇にもどります。

6しかれども我わが王をわがきよきシオンの山にたてたりと。
7われ詔命(みことのり)をのべん、エホバわれに宣(のた)まえり、
なんじはわが子なり今日われなんじを生めり。

という不思議な言葉がある。

「受膏者を今日生んだぞ」

と。

11畏(おそれ)をもてエホバにつかえ戦慄(おののき)をもてよろこべ。

「畏敬の念をもってエホバに仕え戦慄をもって喜べ」

ということだから安閑たる気持ではない。この「畏」の字は「こわがる」ではない。おそれかしこむこと。そして、この畏敬をもって親しむことです。親しまなければダメです。親しめるのは、こちらが平伏しているからです。傲慢な傲然たる態度ではもちろんない。

「わが王をわがきよきシオンの山にたてたり」

という。これもおもしろい。「シオンの山」というのはエルサレムの一角の山ですが、けれども今度は、それが天界のシオンに変わってしまう。新しきシオンです。地上のエルサレムのシオンの山は、その霊的な霊界のシオンの山の予表である、徴である。これは黙示録に出ています。

「1われ見しに、視よ、羔羊(こひつじ)シオンの山に立ちたもう。十四万四千の人これと偕(とも)に居り、

「十四万四千」というのは象徴的な数です。

「羔羊がシオンの山に立ちたもう」

という。エルサレムのシオンの山が今度は天的なシオンの山になる。ずっとここのところは素晴らしいことが書いてある。

その額には羔羊(こひつじ)の名および羔羊の父の名、記(しる)しあり。2われ天よりの声を聞けり、多くの水の音のごとく、大いなる雷霆(いかづち)の声のごとし。わが聞きし此の声は弾琴者(ことひき)の立琴を弾(ひ)く音のごとし。3かれら新しき歌を御座の前および四つの活物(いきもの)と長老等との前にて歌う。この歌は地より贖われたる十四万四千人の他は誰も学びうる者なかりき。4彼らは女に汚されぬ者なり、潔き者なり、何処にまれ羔羊の往き給うところに随う。彼らは人の中より贖われて神と羔羊とのために初穂となれり。5その口に虚偽(いつわり)なし、彼らは瑕(きず)なき者なり。」（黙示録14・1～5）

「女に汚されぬ者なり」

とは男尊女卑的な考えがあるね、悪いのは男の方なんだ、大体が。

聖書の言葉は非常に不思議なミトス的な言葉だけれども、霊的な現実ではみなそれが本当なんです。だから、詩篇第2篇6節の、

6 **しかれども我わが王をわがきよきシオンの山にたてたりと。**

これは、地上のエルサレムのシオンの山から霊界の山に通じているわけです。

12 **子にくちつけせよ、おそらくはかれ怒りをはなち、**
なんじら途にほろびん。
その忿恚（いきどおり）はすみやかに燃ゆべければなり。
すべてかれに依頼（よりたの）むものは福（さいわ）いなり。

「おそらくは」とは、「もしそうでなければ」ということです。

マグダラのマリヤだったかな、ナルドの香油をキリストの足に塗ったりした。ベタニヤの女というのはマグダラのマリヤとちがうのかな。頭からキリストに香油を注いで、器を割ってしまった。器を割って全部キリストの頭から注いだ。

「これは私を葬るためにしたんだ。この女のしたことは福音の宣べ伝えられるところ全世界に語られるべし」

と、キリストは非常に喜んで言われた。もうこの壺は使わないというのが、

「壺を割った」

という意味なんです。全存在でキリストに愛をもって捧げたわけです。「ナルドの香油」とは非常に高価なものです。

「そんな無駄なことをするな」

なんて弟子が下らないことを言っているが、それは大間違いだ。

詩篇第2篇はそういう意味で、

「受膏者をあざけったらとんでもないことになるぞ、それはシオンの君である。子にくちつけせよ、愛をもって」

ということ。シオンの山に立ちたもうところの受膏者とはキリストのことです。

「それはいい加減にするな、おののきをもって親しめ」

というわけです。